

# 念願ベンチ入り 夢舞台へ

2年連続で甲子園の切符を手にした八学光星。約150人の野球部員の中で、わずか20人のベンチ入りメンバーに本県出身の大川駿海（3年・弘前四中出）と背番号⑩と、齋藤琉偉（同・弘前東中出）と⑬の2人の内野手が名を連ねている。27日の決勝こそ出場機会はなかったものの、ベンチから仲間を声をかけ続けた2人。「憧れの甲子園へ行けることが本当にうれしい」と口をそろえて喜んだ。

【本記1面】  
小学1年から弘前市のク



閉会式終了後、優勝メダルを手に笑顔を見せる大川⑩と齋藤⑬—27日午後、弘前市のはるか夢球場

## 光星・本県出身 大川、齋藤

ラフで野球を始めた大川。当時5年生には、2019年の甲子園で令和初の満塁本塁打を放った下山昂大（弘前四中・八学光星出、中央学院大）がいた。「面倒見が良くて、いつも優しい大好きな先輩」。憧れの先輩と同じ八学光星のユニフォームを着て試合に出たいと同校野球部に入部した。ただ、ベンチ入りは速かった。バッティングに苦しみ、部屋で1人涙を流す日もあった。心が折れそうになった時、支えてくれたのは家族だった。「駿海なら

大丈夫。自信持ってやれ」昨秋に初めてベンチ入りしたものの、今春はメンバー落ち。再び背番号をつかみ取った今大会は、3回戦の八戸北戦に代打で出場した。父・知勝さん（45）は「スカウトではなく体験練習に参加して入った憧れの光星。悩んだ日々もあったがよく頑張ったよ」とたたえた。齋藤は、19年に主将を務め、U18高校日本代表にも選ばれた八学光星の武岡龍世（現・東京ヤクルト）に刺激を受け、「県民から応援される選手になりたい」と、打力を武器に弘前聖愛シニアから門をたたいた。苦手とするランニングメニューにもひたむきに取り組み、今春から背番号を手にした。今大会は初戦の弘前工戦のほか、八戸北戦では6番一塁で先発出場した。部員数が多い中ではい上がるのがつらくなり、両親に弱音を吐いたこともあった齋藤。父・茂さん（43）は「悩んでいる姿も見せてきた。壁を乗り越えて大きく成長してくれた」と涙を流した。

お互いに守備や打撃のアドバースをしながら、切磋琢磨して野球に取り組んできた2人。27日の決勝では「お前ならやれるぞ」とベンチから仲間を鼓舞し続けた。憧れの舞台への出場を決め「しっかり準備して、一皮むけた姿を見せたい」と意欲を口にした。

（棟方好華）